

■全体会（2）研修会総括 各講師・質疑応答

（1）ワーキングA



[伊藤 民雄氏]

実践女子学園の伊藤と申します。私はAグループの「基礎から学ぶインターネット情報資源」というテーマで研修を実施しました。

まず、インターネットの情報資源ということですが、インターネットで提供される情報資源の種類等と、その中で図書館が使う情報は何かということをも明らかにしました。第三者から図書館が紹介するリンク集について、三つぐらいの指摘があります。そのうちの一つは、リンク集をつくることで図書館の持っている情報を格段に豊かにできる、二つ目として利用者と情報資源を結びつけられる。三つ目、大学図書館サイトにおいて無料サイト、データベースのみのリンク集を作って提供した場合、最近問題となっているのは、そのリンク集についてリンク切れを多発させている傾向があるということです。それならば、契約データベースと無料サイトを適宜組み合わせることで紹介することにより、メンテナンスに図書館が目を向けられるようにした方がよいという指摘があり、契約データベースと無料サイトを併記するということに着目して今回は受講者のみなさんに演習して頂きました。

続いて、数年前まではPCのことを考えていればよかったのですが、今コンピュータからよりパーソナルな端末に、利用者の学生さん、教職員の方がスマートフォンに割く時間がより多くなっています。限られた画面サイズのもとでスマートフォンのもつ多機能性、伝達方法を含めて、如何に図書館サービスに取り込むかが課題になるという話をしました。

四つ目、CMS時代のサイト構築ということで、今回は、WordPress という CMS（コンテンツマネジメントシステム）を利用して、受講者の皆さんに

リンク集を作成頂きました。このCMSの利点はコンテンツとデザインが別で、テンプレートとプラグインを利用し、テンプレートというテーマでサイトデザインを決定し、そしてプラグインというものを組み合わせますと、先ほど4人の方の例を見て頂きましたが、すぐにサイトをつくることできるという特徴があります。それに、第三者が作成したYouTube、Googleマップ、ウィキペディアなどの各種コンテンツを取り込みながら、今回は編集を行って頂きました。今ここに一覧として各図書館、リンク集がどうなっているか、先ほどデータベース集とリンク集が今、どうなっているかを調べたところ、分離しているところが多く、一緒にしているところはあまりありません。

無料サイトのみではなく、契約データベースに無料サイトを組み合わせるリンク集を作る課題を10人の方に作って頂きました。

愛知医科大学さんの例を、見てみましょう。医師のためのサイト集ということで作って頂きました。ウェブベースの文献情報管理・論文作成支援情報を作って頂きました。RefWorksの説明をし、ProQuestが提供するものの使い方、YouTubeの動画を貼り付け、よりよい資源が使えますよという案内をしながら、どういうものが使えるか説明をしています。さらに、ReadCubeの動画を貼り付け、スマートフォンアプリ、Evernoteというものがどういうものであるか動画が貼られています。今回はWordPressを初めて使う方が多い中で、数時間で理解して頂き、ある程度のページコンテンツを作成して頂いた受講者の方に感謝したいと思います。今後の展開として、事前課題が膨大な量でしたので、情報共有のため、ひとつのまとめサイトをつくらうと思っています。私のほうで原形を作って受講生の方に編集して頂き、近日中にリンク集とまとめサイトを公開して頂こうと思っています。

(2) ワーキングB



[岡野 裕行氏]

グループBを担当致しました岡野と申します。ビブリオバトルは、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」というコンセプトを掲げておりますが、先ほど実際のバトルの様子を皆さまに見て頂いた通り、三人のバトラーの方が紹介された本を私たちが知れたことと同時に、それぞれのお人柄も私たちに伝わってきたと思います。

昨日・今日の二日間にわたり、グループBの皆さまにはバトラーの立場でビブリオバトルに取り組んで頂いたのですが、実際に大学図書館で実施される場合には、学生がバトラーとなり、職員の皆さまは運営側の立場で関わることが多いと思います。とはいえ、まずはバトラーとして参加する人の気持ちを分かった上で運営に関わったほうが、ビブリオバトルの導入もスムーズだと思いますので、まずは職員同士の非公開の館内研修でも構いませんので、自分たちで実際にやってみてください。公式サイトもこまめに更新されておりますし、関連本も3冊出ておりますので、それらも随時参照しながら企画をしてみてください。

ビブリオバトルは、本の紹介を通じてコミュニティづくりをするという機能もあります。大学図書館の場合は、学生に参加してもらうことが第一の目的になると思いますが、せっかく開催するのでしたら、参加者を学生だけに絞るのはもったいないと思います。職員や教員も大学というコミュニティの構成員ですので、学生と一緒にビブリオバトルに取り組んで頂くと、学内的な普及もより進むのではと思います。たとえば本学では、学園祭のときに「教職員ビブリオバトル」を実施しています。これはサークルの学生が実施しているもので、学生たちが主体的に考えて提案された企画でした。教職員は普段、業務の一環として学生に接しているので、学

生側からするとその人柄を知る機会がめったにないわけですが、仕事から離れた教職員の普段の顔を知れるということもあって、学生からも人気のある企画になっています。

また、大学図書館内で実施するだけではなく、学修支援や就職支援の窓口など、学内のオープンなスペースならば、こういった場所でも実施が可能だと思います。図書館側からの企画として行うこともできますが、図書館職員だけが運営主体になるのではなく、学内の他部署との連携・協力のなかで実施してもいいと思います。何らかの学内イベントと関連づけて実施することも有効でしょう。大学でのビブリオバトルの開催形態には、大きくわけて3種類あって、職員が主体となって実施するもののほかに、教員が主体となって授業などで行う場合や、学生が主体となって自分たちでサークルなどをつくるケースもあります。特に教職員が関わる場合には、ビブリオバトル実施の目的やターゲットを明確にして企画して頂くと良いと思います。

そのほかにも、大学と地域コミュニティとの連携事業としても実施しやすく、たとえば本学ではこれまでに、地元伊勢の商店街や県立の博物館を舞台にビブリオバトルを行ったりしてきました。今日ではどの大学でも地域連携というキーワードが重要になっていると思いますが、そういうところにも活用できるようなイベントだと思います。本学ではオープンキャンパスでも実施したことがあり、見学に来た高校生や保護者の方に向けて、学生が取り組んでいる活動紹介としても効果的でした。皆さまは図書館職員なので、まずは図書館を舞台としてビブリオバトルの実施を考えるとと思いますが、大学周辺の地域社会に目を向けてみれば、そのほかにもいろいろな機会を見つけることが可能です。

図書館で行う場合には、ラーニングコモンズなどの会話が出来る空間が備わっていれば、そこでの開催がもっとも実施しやすいと思います。また、大学図書館主催として企画を立てる場合でも、図書館の空間を飛び出し、教室や共同研究室、学食、屋外など、学内でも学生が集いやすい空間を見つけることも可能です。ビブリオバトルは学内だけではなく、学外からも開催の需要が高まっていますので、本学の学生の場合でも、学外コミュニティとの連携が進んでいます。商店街や博物館のほかにも、三重県教育委員会からの要請を受けて、「高校生ビブリオバトル」の運営・進行のボランティア活動も行なうようにな

りました。ビブリオバトルを通じて大学生と高校生
の間に交流が生まれるという点で、おもしろい事例
だと思います。ビブリオバトルの活動を続けていく
と、学外に出ている方々と交流するきっかけも
生まれてくると思います。

また、大学は学生たちが4年間という時間をかけ
て育っていく空間であり、いずれ卒業を迎えて社会
に出ていきます。大学図書館でのビブリオバトルを
体験した学生が、卒業してから地元でビブリオバト
ルのコミュニティを新しく作り出した事例もあり
ます。大学図書館が主催したことでビブリオバトル
の楽しさを知り、それが学生の未来につながって
いくこともあるわけです。ビブリオバトルが生み出す
コミュニティによって、学内・学外を問わず人と
人がつながっていくことを考えると、本を通して
「つながる」というのがグループBのキーワードの
ようにも思えます。

開催にあたっては、単発のイベントとして実施し
てみるのもいいのですが、参加者の反応を見ながら、
大学図書館での定期開催という形式にすることも有
効だと思います。その場合、最初の導入では図書館
職員が関わることもあると思いますが、いずれは職
員の手を離れ、学生たちによる自主運営という形に
することもできると思います。学生たちがビブリオ
バトルのコミュニティを部活動化してしまい、図書
館側は開催のための場所を貸しているだけの段階に
なれば、職員の業務負担も減りますし、コミュニティ
にも継続性が生まれてきます。

最後にビブリオバトル普及委員会の立場からの宣
伝ですが、「全国大学ビブリオバトル2014～京都決
戦～」が12月14日に京都大学で開催されます。ぜひ
各大学での予選会開催をお願い致します。また、京
都決戦の前日となる12月13日には、初めての試みと
して「ビブリオバトル・シンポジウム2014」を立命
館大学にて開催します。ビブリオバトルの考案者で
ある谷口忠大先生の基調講演を始めとして、学校教
育、地域コミュニティ、図書館の三つのテーマに分
けて、パネルディスカッションを行う予定です。図
書館分野のパネルディスカッションのコーディネー
ターは私が務めます。ぜひ職員さんや学生さんにお
声がけして頂ければと思います。

(Q-①)

本学でも今年から教員と連携してビブリオバトル
を行っておりまして、参加者には好評なのですが、

始めたばかりで知名度がなく、せっかく告知をし
ても「何ですかこれ」で済まされてしまうことが多
いのが現状です。効果的に「ビブリオバトルってこ
うなものだよ」と学生たちに広めることができるよ
うなアイデアをお聞かせください。

(A)

ほかの図書館イベントも同様だと思いますが、広
報については、特効薬はないと思います。まずは少
人数でも開催してみることに加え、地道に継続して
みることでしょうか。単発ではなく、継続して
みることでそこに磁場のようなものが生まれると思
います。あとはやはりできる限り人目につくように
するために、オープンな場所で開催することですね。
たとえば公共図書館ではもっとも継続した活動をし
ている奈良県立図書情報館なども、入口を入って
すぐのエントランスで開催しています。大学図書
館の場合は、ラーニングコモンズや入口近くのオー
プンスペースなどで開催し、まずは偶然通りか
かった学生だけでも、活動の様子を目にする機会
を増やすことだと思います。その時は参加できな
くても、次の機会に参加してもらえれば、少しづ
つ人も増えていくと思います。教員の方の反応な
どはいかがでしょうか？

(Q-①)

教員についても非常勤講師の方を含めて、複数
人参加して頂いています。実際に参加して下さ
った教員には好評に受け止めてもらっています。
あとは授業で取り入れている方とも連携して
みたのですが、やってみるとやはり「ビブリオ
バトルはいいね」という感想になります。図書
館のオープンスペースでやっているのですが、
最初は遠巻きに見るだけの学生が多くて、
途中で帰られてしまうことも多いです。や
はり繰り返し実施してみるしかないかなと思
います。

(A)

全員が参加し続けるのはなかなか難しいと思
いますので、まずは関心の高い積極的な人
たちに参加してもらいながら続けていけば
いいのかなと思います。あるいは先ほどの
教員の話ですと、たとえば教員経由で「
〇〇学部から学生さんを一人お願
いします」と指名する形で協力して
もらうというのはいかがでしょうか。
本学の場合も、教員経由でのバ
トラー依頼を行ったりしています。

(Q-②)

うちではブラウジング雑誌を毎年契約するに当たって、教職員や学生さんにアンケートをとっています。まだ実際にはやっていないのですが、今年はビブリオバトルを行って、チャンプ本になった雑誌を一年間購入してみようかなと企画しています。これについて、何かアドバイスをお願い致します。

(A)

ビブリオバトルで雑誌の紹介ですか？

(Q-②)

そうです。雑誌を対象としたビブリオバトルで、オーディエンスの方にも聞いて頂いて、チャンプ本になった雑誌を一年間契約してみたいと考えています。

(A)

とりあえず、一年間ということですね。雑誌でビブリオバトルというには、事例としてはあまり聞かないのですが、実際にビブリオバトルの結果を、受けて契約するところまで可能なのでしょうか？

(Q-②)

あくまで一つの案です。

(A)

図書館の予算的にも OK なのですか？

(Q-②)

今のところは一応 OK です。学術雑誌はそうはいかないのですが、今までも館内でアンケートをとって図書館に掲示をして、投票制の形で雑誌を購入したりはしています。

(A)

こういった事例はあまり聞かないですので、むしろその反応はどうなるのかに興味があります。けれど雑誌って号によって内容も違いますから、ビブリオバトルとして紹介するのはちょっと難しいのでしょうか？

(Q-②)

一応はテーマのある雑誌ということで考えています。

(A)

あまり聞いたことがない事例ですので、それはぜひ実証実験して頂けると面白いと思います。成果がどうだったのかを私も知りたいです。

(3) ワーキングC



[仁上 幸治氏]

ワーキングCの3つの小グループの中から投票第一位に輝いた一押し「クローズアップ現代」風スタジオ設定のプレゼンテーションを見ていただきました。いかがでしたでしょうか。「演出」については初日の全体講演の中で様々なノウハウをご紹介しましたね。その成果がどれだけ取り入れていただけたか講師として秘かに楽しみにしていました。

演出の第一は、対話型でした。第二は、一番後ろの席からでも読めない字は一つもないようにクローズアップで投影しました。第三は、雰囲気づくりでアピールしました。少々仕込みとヤラセ等が目立ったかもしれませんが、これは私が聞き手に分かるように大げさに演技するようにとお願いしたせいです(笑)。しかもアドリブも入っていたと後から聞きましたので、第四に、臨機応変というプレゼンテーションのライブ感も見せてくれましたね。

この2日間を通して、最初はパソコン操作の復習から PowerPoint によるスライドショーづくりの便利技の練習から始めましたが、各自持ち込みのスライドがみるみる見やすくわかりやすく改良されていきました。めきめき上達する方が多かったですね。その結果、成果物としてスライドショー作成マニュアルのような現物見本ができました。そのノウハウを自分の仕事で実際に使うスライドの改善に応用していただければと思います。

この調子でスライド作りがどんどんうまくなってくるともっと多くの人前で発表したくなりますよね(笑)。ビブリオバトルの発表を見て思ったのですが、「オリエンテーションスライドショーバトル」なんていう発表大会というアイデアはどうでしょう？ どのオリエンテーションが聞きたくなりましたか？ という基準で投票しあって優勝者を決めて表彰式を行う。そういう応用ができるのではないで

しょうか。

もうひとつ、雰囲気づくりという演出にも成果があったと思います。ワーキンググループで作業をしていく中で、メンバー同士が打ち解けてだんだんチームとして盛り上がってくると作業自体が楽しくなってきます。お互いに学びあいノウハウが共有されるようになって、最後に全員の知恵が一つのスライドショーに結実しました。結果だけでなくプロセス自体が上達する楽しさにあふれていて、知恵が共有されていく感じも伝わってきました。まさに研修の醍醐味ですね。ノウハウの共有が今後の現場での実務の中でどのように花開くか楽しみなワーキングでした。

[Q]

ワーキングの教室で小グループで発表した時、質疑応答の時間に質問する人が少ないということをおっしゃっていたと思いますが、全体発表ではグループCの方からの質問率が高かったと思います。フロア側から積極的に参加するということが改善されたと思ってよろしいでしょうか？

[A]

そうですね。やはり空気感ですね。全体が楽しく和気あいあいとした雰囲気になって気軽に発言してもいいという信頼関係が出来上がってくると質問が出やすくなるという典型的な例です。多数の人の前では発言を尻込みしてしまう人もいますから、小さいグループにして発言に勢いをつけてから全体会で討論するようにすると活発な話し合いが生まれることがありますよね。そういうファシリテーションの演出のコツはまたどこかで応用してください。

(4) ワーキングD



[弓立 順子氏]

今回のテーマ「空間の演出力」は、初めての取り

組みとお聞きしています。

私もこの会に出席させていただくのも初めてですし、皆様方がどのくらいの、どんな知識があるのかわからず、何から話すのが一番いいのかなと思いました。実際に空間について何か実践しようとすることは非常に難しいです。たとえば、ために壁の色を赤にしたいといっても、実際のところでやりようがない。CADのソフトにSketch Upというのがある、使い勝手が良いものですから、みなさんと少し空間のデザインをやってみようと思いました。先ほどのWordPressを初めて使って短時間で仕上がったものができていたのですが、残念ながら我がグループでは使ってはみたけれど、時間不足とソフト操作が少し難しく、発表できるまでは至りませんでした。しかし可能性はなんとなく感じていただけたと感じています。

実は空間演出力というものは、図書館にとって、非常に大事なことだと思います。大勢の学生さんたちに来てほしいと皆さんが思って努力されていると思います。学生が好んで来てくれる空間、居心地の良い空間を作りたい。どうすればよいか、それは難しいですね。答えはないですし、どうしたらよいですよという答えにもなかなかありません。それぞれ環境が違いますし、置いてあるものも違う。

ただ、全員に共通して言えることは、最初にヨーロッパの街のスライドを見てもらいました。とてもきれい。石畳があって。みなさん想像がつかますよね。次に新宿の飲み屋街の写真を見てもらいました。ごちゃごちゃな雰囲気です。新宿の駅前のスライドでは、ビルの上にはすごい数の看板が付いています。一つずつのサインは、ものすごく考えて目立つようにデザインされている。ところが、全体を見ちゃうと、どれか一つが目立つことなく全体がごちゃごちゃに見えてしまう。それがいいとか悪いとかではなく、別な見方をする。わくわくしたり、素敵などころに行って見たいと感じる空間というのは誰の心にもあると思います。その気持ちを大切にいただき、毎日通っている我が図書館も別の観点、美しいか美しくないかという見方で見ていただきたい。一生懸命に作った案内や注意案内などを貼る時に、一歩下がって空間全体を見ていただき、きれいか、きれいでないかという視点で見てください。貼ること、案内することに一生懸命になって貼ってしまいましたが、空間全体で見てみる。そうすると居心地の良いきれいですっきりした図書館ができていくのか

などと思います。

今回、名古屋学院大学の図書館を見せていただきました。とてもきれいで新しく素晴らしい図書館ですが、全員であら探しのようなことをしてしまい申し訳なかったです。今回、愛知大学の図書館でなくてよかったと思っています。実は、私は愛知大学の図書館のインテリアデザインをしています。

インテリアデザイン、建築とかをやっている、デザインする時にはよかろうと思って一生懸命やります。実際に使われて何年かたった状態でお話を聞くことが大事だと考えますが、なかなかそういう機会がなくそのまま過ぎてしまっています。今どんな使い方をしているか気にはなるところです。こちらの思いと、そうでないところが、どうしても出てきてしまう。先ほど食事に行くために1階に降りた時、掲示板がありました。多分マグネットで貼ることで綺麗に掲示ができるようデザインされています。掲示物を取ったりはずしたりしても綺麗に使えるはずなのに何故かセロテープで貼られている。どうしても経年のセロテープが汚く残っている。毎日のことなので、慣れてしまっているとそれが見えなくなってしまう。そこで、やはりもう一歩さがり全体の空間をきれいかなと見て、掲示の貼り直しをしていただくとても良い環境になると思います。

そういう気持ちというのは忘れてはいけないことで、「うちは古い図書館だから綺麗にならない」のではなくて、少し工夫すれば、きっと居心地のいいものが作れるような気がします。古いからといってあきらめず、どんなことをすれば少しでも居心地が良く、すっきりしたように見えるのか努力していただければと思います。

もう一つ、グループではご存知の方が少なかったもので、ここでも紹介したいと思います。ユニバーサルデザインという言葉は皆さん知っているかと思いますが、「カラーユニバーサルデザイン」という言葉を知っていらっしゃいますか？「ユニバーサルデザイン」というのは誰もが同じように不具合を感じることなく使えるというような主旨のものです。

「カラーユニバーサルデザイン」は色についてのユニバーサルデザインということです。インターネットで、カラーの“C”ユニバーサルで“U”デザインで“D”オーガニゼーションの“O”、“CUDO”で検索していただければと思います。説明すると長くなるので、ぜひ検索してみてください。皆さんフライヤーとか注意事項を作られると思いますが、実

はあまりはっきり見えないということが起こってしまいますので、そのあたり勉強していただければいいかと思います。

また、このような機会がありましたら、どんなことが一番皆さんに役に立つか今後の課題とさせていただきます。

(Q)

大変ためになるお話を頂きありがとうございます。

図書館や本屋へ行くと、ワクワク感があると思います。先生も体験されたことがあると思いますが、その分析等はされたことはあるでしょうか。

(A)

今まで、本当に多くのいろいろな場所の設計をしてまいりました。その時に人がどのように感じるのかということ調べていかなければいけないと思っています。人の五感、どのようにインテリアを感じているのかを研究しなければいけないと思い始めている最中です。人の感覚を測るとするのが非常に難しく、例えば、この明るさの中で見えているものが、ちょっと暗くなったりするだけで、色が違って見え、気持ちが違うだけで、色の感じ方が違います。そのあたりを数量化していくことはまだまだ課題です。

(5) 全体講評

[仁上 幸治氏]

初日の全体会講演について最も反響が多かったのは亀の話でした(笑)。たしかに、動画のパワーを活用する演出が大切だという話の趣旨が伝わったのかなと思います。ただ、本論についての反響があまりなかったことに、一抹の寂しさを感じますね(笑)。まあそれは後日、メールで頂けるものと期待しております。

全体講演では最初、リアクションが薄いかなと感じていましたが、今日のグループ発表を聞いていると、少し違う解釈をしないとイケないかなと認識を改めました。つまり、皆さんは割と控えめな方が多いようで、大勢の前で直接、個人としては発言しないけれども、実は結構人前に出たがりなのではないんですか。

今回のテーマとして「オサメル」のほうの「学修支援」というキーワードがありました。研修会全体として、見せるとか伝えるということの大切

さ、それが学修支援につながっているという趣旨ですよね。ワーキング活動を通して明らかになったのは、工夫すればもっと伝わる、魅力的に見える、その工夫のしかたを考える視点として、受け手側の感覚を意識した「演出」というキーワードが見えてきたのではないのでしょうか。そういう感覚が確認できてとても嬉しく思います。

実際、全体講演とCグループ担当だったのですが、他のA, B, Dグループものぞいてみたかったですね。次回はグループ担当を外していただいて自由に動けるといいなと思いました。ぜひ報告書で勉強させていただきます。

もう一つ分かったことはみなさん、段々楽しそうになっていくということです。グループCも最初は硬かった。しかし、小さいグループで討論したり、発表したりして、楽しさが湧いてきて、最後に会場に前向きな討論の声が充満してきました。びっくりするぐらいの変化だと思います。二日間のいろいろなコミュニケーションの中で、全体の空気が良くなって、一人ひとりが前向きに変わって、いい展

開につながったのではないかなと思います。この経験から得られた教訓は、学修支援の場に応用できそうですよね。学生さんたちに対して、自由な空気と楽しい雰囲気をシェアできるように細かい点まできちんと配慮がいきとどいた演出をすれば、オリエンテーションやガイダンス、講習会の効果も、もう一ランク上がっていくのではないのでしょうか。

今回、個人的には主催者の方とは準備の打ち合わせのため、半年くらいずっとメル友状態でした(笑)。何十通というやりとりをしてここまで辿りつきました。出し物、内容の時間配分、事前課題、使うワークシートの作成などなど、主催者側のさまざまな熱意、気配りがこの実り多い研修会につながったと思います。お礼の言葉をもって終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

記録：金子 善一郎 (愛知大学豊橋図書館)

小木曾 知子 (愛知大学名古屋図書館)